

# 千手観音坐像

一軀

# 四天王立像

四軀

京都・寂照院蔵

かつて山城国乙訓郡にあった海印寺の跡を継ぐ寂照院（京都府長岡京市奥海印寺）は、千手観音像を本尊とし、そのまわりに四天王像を安置する。後者は、その増長天像に建保五年（一一二七）、仏師院能作の像内銘記を有することから、この地域における院派仏師の活躍を示す一例として知られてきた。最近これらの像を精査する機会にめぐまれ、従来あまり注目されることのなかった本尊像が、頭部のみではあるが思いのほか古様を示し、また四天王像も、一部では指摘されることもあったようだが、必ずしもすべて同作とはいえないと思われたので、ここにその考えの一端を披露したい。

## 千手観音坐像

頭上に十一面をいたたく、四十二臂の通行の千手観音像（挿図1）であるが、一木造の頭部に対して、体部が寄木造となり、大きさも体部がやや矮小で比例を失っていることから、両者は明らかに別作で、体部は頭部に合わせて後世補作されたものである。

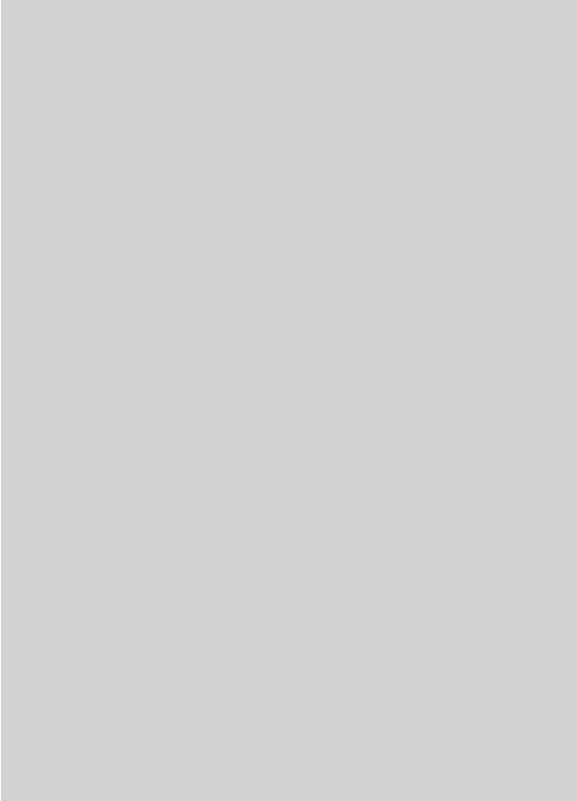
頭部に焦点を絞って、形状・構造等の記述を行おう。宝髻を結び、地髪部は毛筋を粗ら彫りとする。化仏、頂上仏面、頭上菩薩面をあ

らわす。耳朶環状。鬢髪が耳を横切ることはない。白毫をあらわし、頸部に三道を刻む。

針葉樹と推定される一材から彫出される。漆錆下地とし、白色の地に彩色されるが、仕上げの色の判別は困難である。体部像内から頭部との接合部を窺うと（挿図2）、頸部のまるみのまま（左右の径一〇・三cm）材が下に伸び、途中で輪截りにされている。

化仏、頂上仏面、頭上菩薩面は中・近世の補作であり、ほかに、宝髻、白毫、右耳を含む後頭部も後補である。三道に木屎漆の盛り上げが見られるが、これも後補であろう。

半眼となる目が二重瞼で（右目は一重に改変されている）、下瞼が強く湾曲するところは、一見して、東寺（教王護国寺）講堂の梵天像を想起させる。狭い額、腫れぎみの上瞼、まるい鼻先、刻線が一本入る上唇の縁なども、非常によく似ている。天冠台の形も同じである。



挿図1 千手観音像 寂照院



挿図2 千手観音像（像底） 寂照院

側面にまわり、舌状に垂れる鬢髪の形はまさに酷似といつてよい（図13―17）。その割に耳の形があまり似ないのは、東寺像は脇面が付くので、耳が前後に圧縮されたせいだろうか。こころみに、東寺像の脇面の耳の、耳孔が上寄りで、その下が長く感じられるつくりは本像のそれに近い。

全体の印象としては、本像の面長おもながに対して、東寺像は球形のようなくらみがあり、それがただひとつの相違点といえる。しかしそれを除けば、これほどの類似はあまりあるものではなく、これが、両像の製作時期の接近を示すのもちろんのこと、さらに、工房や工人が共通するものであった可能性をも想定せしめる。

『文徳実録』仁寿元年（八五二）六月八日条の東大寺僧道雄の卒伝に

初道雄有<sup>レ</sup>意<sup>二</sup>造寺<sup>一</sup>、未<sup>レ</sup>得<sup>二</sup>其地<sup>一</sup>、夢見<sup>二</sup>山城国乙訓郡木上山

形勝称<sup>レ</sup>情、即尋<sup>二</sup>所<sup>一</sup>夢山<sup>一</sup>、奏上造営、公家頗助<sup>二</sup>工匠之費<sup>一</sup>、有<sup>二</sup>一十院<sup>一</sup>、名<sup>二</sup>海印寺<sup>一</sup>

とあり、道雄が海印寺の創建者だったことを伝えている。道雄は東大寺に華嚴と因明を学び、また空海にも師事し、真言密教を授けられている。承和十四年（八四七）律師、嘉祥三年（八五〇）に権少僧都に任ぜられた。海印寺の創建はこの頃と推測され、事実、文永二年（一二六五）の後嵯峨天皇院宣（『東大寺統要録』所収<sup>1</sup>）には、嘉祥年間（八四八―八五二）の建立とある。嘉祥四年に定額寺に列せられ、年分度者二人と定められた。この寺の建立は、「公家頗助<sup>二</sup>工匠之費<sup>一</sup>」と卒伝にあるように、国家的規模の事業として推進されたものようである。

どのような尊像が安置されたかについて古文獻からは知ることができないが、近世の縁起や勸進帳<sup>2</sup>には、千手観音が本尊だったとしている。寂照院が、中世以降衰退しさらに応仁の乱で廃滅した海印寺を継いだ唯一の子院であることを考えるならば、本像が海印寺創建時の本尊であったと推定することも、あながちに荒唐無稽とはい切れない。

だとすれば、本像は、頭部のみではあるが、海印寺草創の嘉祥の頃、つまり九世紀半ばから少しさかのぼる時期の造立となる<sup>3</sup>。承和六年（八三九）開眼の東寺講堂梵天像との類似も、そのことも裏付ける。

なお体部の補作は中世のものと考えられ、推測するに、文永二年に海印寺の再興を促した後嵯峨天皇の前記院宣の内容からして、これ以降のことであろう。

〔法量 単位cm〕

像高 七五・五

頂―顎（頭上仏面を除く） 二六・四

面長 一二・九 耳張 一五・四

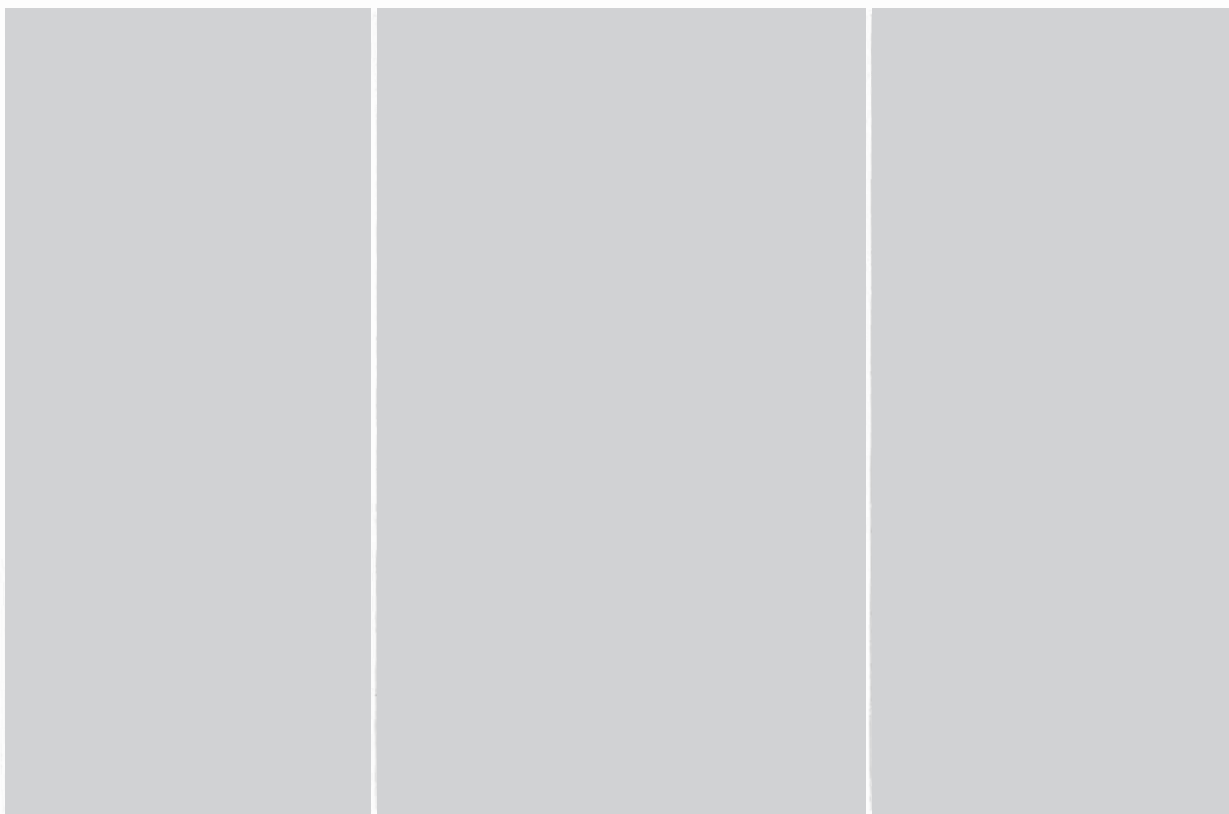
面幅 一一・八 面奥 一六・三

### 四天王立像

本像についてはすでに中野玄三氏による論考<sup>4)</sup>が公表されていて、形状・構造・銘文等の詳しい記述がある。このうち、しばしば言及されることだが、広目天像だけがほかと異なり一木造（内刳りはない）で、その造形も、線の細いつくりとなつてゐるのをどう解釈するかという問題があるのだが、今はそれはさて置き、ここでは、多聞天像もまた異質であるという指摘をしたい。

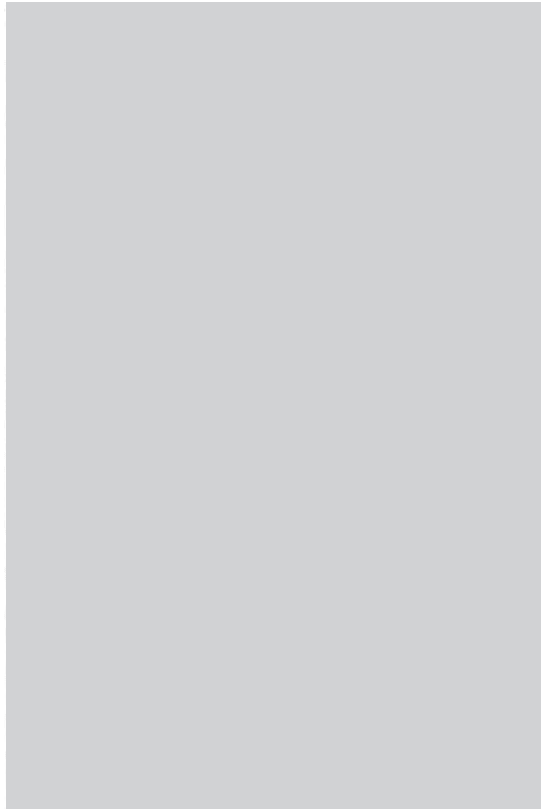
多聞天像を、建保五年（一二二七）仏師院能作が確実な増長天像やそれと同作とみられる持国天像と比べると、身振りや衣の翻えりといった動きが少なく、また頭部を小さくし、そこに小づくりの目鼻口を中央に集めることで、激しい感情を露わに出さないところがあり、両者の造形性は確かに異なつてゐる。鎌倉的な大仰なつくりの院能作の二像に対して、本像の方は、平安時代後期、十二世紀後半の作とするのが妥当だろう。この頃の作である宝生院毘沙門天像との類似がそのことを証している（図18）

本像の眼球がかなり飛び出しぎみなのも、特異な表現である。この時期、仏像の瞳に異材を装填する試みのあつたことはすでに指摘したことがある<sup>5)</sup>。これは奈良時代の技法の復活ではなく、宋代仏像



挿図3 四天王像（右から持国天、増長天、広目天） 寂照院





挿図4 多聞天像 (背面) 寂照院

の同じ技法を採用したものであり、その結果これによった像は、宝生院像に顕著に見られるように(図18)、宋仏と同じく、瞳を飛び出しぎみにすることが多い。このような事例から、本像も異材の装填かと疑われたのでX線透過撮影を試みたのだが、そのような痕跡はなかった。つまり本像の場合、瞳を顔面と共木で彫出しながら、視覚の上では、あたかも異材装填のごとくに行っているのである。いい換えれば、飛び出した目は、異材装填にともなう珍奇な表現ではすでになく、もはや定着したひとつの様式となっているのである。そのことからまた、本像の造立時期は狭められる。

ところで、各像の乗る邪鬼も一樣ではない。持国天像分と多聞天像分は同じ手である。広目天像分は、これに倣いつつもやや鈍重な感じは、像本体と同時の作であるためだろう。増長天像分だけは、蛇を巻き大袈裟な動きを示すことから、またもうひとつの別手といえる。持国天像・多聞天像分が平安時代後期の古様を示すならば、

増長天像分と広目天像分はさらに下る別々の時代と、それぞれを分けることができる。

このように本四天王像は、平安時代後期作の一具だったものが、少なくとも多聞天像を残して何かの事情で失われたあと、建保五年およびもう一度、補われたと見ることができる。

〔法量 単位cm〕

持国天像	一一五・一	同 (邪鬼を含まず)
増長天像	一一一・三	一〇二・五
広目天像	一一四・八	一〇一・五
多聞天像	一一一・五	一〇三・〇
		九九・五

\*細部の大きさは中野論文参照

(伊東史朗)

〔注〕

- 1 山城國 海印寺宗性法印院務之時被<sup>レ</sup>返付<sup>レ</sup>之被<sup>レ</sup>院宣<sup>レ</sup>稱山城國海印寺者道雄僧都之建立嘉祥明時之定額也而草創年積花構空廢剩近年以降或爲<sup>レ</sup>寮領<sup>レ</sup>疲<sup>レ</sup>力役<sup>レ</sup>或入<sup>レ</sup>人家<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>相傳<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>佛地物<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>他用<sup>レ</sup>者戒律之所<sup>レ</sup>禁格條所<sup>レ</sup>誠也自今以後如<sup>レ</sup>元宜爲<sup>レ</sup>東大寺別院尊勝院末寺<sup>レ</sup>早企<sup>レ</sup>蘭寺<sup>レ</sup>一字之營作<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>致<sup>レ</sup>花巖<sup>レ</sup>三昧之練行<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>院宣如<sup>レ</sup>此悉<sup>レ</sup>之謹狀  
 文永二年十月廿二日 左大辨雅言  
 尊勝院院主法印御房  
 表書民部卿法印御房云々
- 2 中野玄三「寂照院の仏像」(『国華』九四七 昭和四十七年)に、東寺観智院所蔵の海印寺誌の紹介がある。大永三年(一五三三)撰の漢文縁起、元禄二年(一六八九)撰の仮名まじり縁起、そして同三年の勸進帳の三

- 本がそれである。いずれも、妙見菩薩の化身たる童子が道雄を導いて  
椎樹の下に至り、その樹上に現われた尊像を見て、仏像をつくり、海  
印寺を建てるといふ筋は一致しているのだが、仏像について、大永縁  
起では「大悲之像」と記し、元禄縁起は、樹上に「千手大悲の像」が  
湧出し、「観音の像」を安置したとし、勸進帳では、樹上に「千手千眼  
の尊像」が顕れ、「千手観音」を安置したとする。
- 3 従来の報告書は、本像を鎌倉時代の作とし、頭部の古様については言  
及されない。
- 『京都の美術工芸』乙訓・北桑・南丹編（京都府文化財保護基金 昭和五  
十五年）
- 長岡京市教育委員会『寂照院総合調査報告』長岡京市文化財調査報告  
書第一六冊（昭和六十年）
- 長岡京市『長岡京市史』建築・美術編（平成六年）
- 4 中野玄三氏前掲論文
- 5 伊東史朗「醍醐寺災魔天坐像と瞳嵌入」（『ミュージアム』四七四 平成二  
年）
- 6 飛び出す瞳は黒漆塗り、周囲の白目の部分を白色に塗る。目の輪郭は  
X線不透過なので鉛白と推定される。